
最終回

kazuya

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

最終回

【コード】

N2084C

【作者名】

kazuya

【あらすじ】

私の「最終回」はきっと素敵なものになるだろう。

まえがき

今回は「最終回」をお買い上げいただきありがとうございました。このまえがきのあとに白紙のページがあります。そこにあなたの理想の一日を書いてください。翌日にはその一日が現実のものとなります。書き方は自由です。何を書いてもかまいません。あなたのしたいこと、行きたいところ、体験したいこと、食べたいものなどです。時間や場所など細かい設定を書く、より現実に表現しやすくなります。この「最終回」にはあとがきはありません。あなたの書いた一日が実行され、深夜零時になるとあなたはこの世から消えてしまいます。ドラマの「最終回」のような夢を味わった後、あなた自身も「最終回」を迎えるのです。決断はあなたがするので。実行するしないもあなたの自由です。ではページをめくってください。見開き二ページの白紙があります。その部分に理想の一日を書いて付属のしおりを挟んでください。では最高の「最終回」を。

見た目はかなり薄い文庫本でまえがきと白紙のページがあるだけ、これで1500円はどうかと思うが発売一週間にして発行部数は100万部を超えた。購入する人は若者から老人までさまざまである。この国は本当に病んでしまったのだとを感じる。命と引き換えに理想の一日を買う。ルミもこの本を手にしてしまった一人である。

私はもうダメだ。どうして生きているんだろう。いいことなんて何もない。この世の中にはすでに失望している。格差つてよく言うけど、金銭だけのことじゃないと思う。人生にも格差がある。もうがんばっても報われる時代じゃない。私みたいな人間はずっとこの世でさまよい続ける。光を見つけてもニセモノだったりする。ため息

で視界がぼやけてしまうような日々を送っていた私にとってこの本は唯一の救いだ。何を書くかは決めていた。一時間かけて白紙のページに理想の一日を書き、しおりを挟み、ベッドに入った。私の「最終回」はきつと素敵なものになるだろう。

『10時に商店街に行く』

目覚めは良かったが目覚まし時計はならず、針は9時半を知らせている。まずい、こんな日に限っても私はついていない。適当に顔を洗い、何も食わずに家を出る。商店街までは20分あればつくからギリギリ大丈夫だろう。あ、本を忘れるところだった。急いでその本を取ると玄関を勢いよく出た。

『ぶらぶらしていると数分後にキムラ君に偶然出会う』

キムラ君とはバイト先にいる私と同年代くらいの男である。私は彼が好きだった。だけど、この性格ゆえ、何も行動を起こせず、話したことすらない。ずっと見ていただけだった私が彼と偶然出会うというストーリーである。

『キムラ君が声をかけてくる』

現実ではありえない。絶対にありえないが私が書いたのでありえる。「ルミさん、こんにちは」

「こ、こんにちは」

顔が熱くなる。私の顔はたぶん真っ赤だろう。恥ずかしい。

「ルミさん、今日暇だったらどこかへいきませんか？嫌だったらいいですけど。」

嫌なわけがない。これも私が書いた。

「全然大丈夫です」

「良かった」

不自然なことがとても自然に行われている。やはりあの本の威力はすごい。今まで一度も話したことがないのに、なぜか前から友達だったように会話は弾んでいく。この感覚は何だろう、最近あまりこんな感覚はなかったなあ。でもこれも私が書いたこと。

「会話は弾み、楽しい時間をすごす。昼前くらいになってどこか店に入って昼食をとる。」

「ルミさん、お腹すかない？どこか入ろうか。」
「そうですね。」

やはり、ここでも会話が弾む。昼食を食べ終わってもずっと話していた。何をこんなに話すことがあるのだろうか。席の窓から見えるトイレ、ブードルを連れた婦人、この店の料理の出来、今日の空模様、どうでもいいことなのにキムラ君と私には笑顔が絶えなかった。そしてあつという間に時は過ぎる。

もう夕方になっていた。冷静に考えると、今まで話もろくにしなかったバイトの同僚とこんなに長くいるというのは不自然だ。彼は私が想うキムラ君に間違いないが、私のストーリー上のキムラ君で、現実のようで現実ではない。忘れていたけど私は今日「最終回」を迎えるのだ。なんだか複雑な心境だ。私は今日で人生を終える、ただそれがなければ、今日の夢のようなひとときは手に入れることができなかつた。私は幸せなのだろうか、不幸せなのだろうか、一瞬生きたいということが脳裏をよぎるが、この本を手に入れる前の自分を思うとその考えは消えた。これでよかった。ソフトクリームを両手に持って笑顔の彼がやってくる。これでよかった。この思いは確信に変わった。

「星の見える公園へ行く。」

近くに星がきれいに見える公園がある。公園といっても何もないうちで街灯もあまりない。でもだからこそ星が良く見える。

「きれいだね。」

「そうだね。」

私と彼の目の前には幾千の星が輝いている。私は最後の一日にこの星の数くらいの幸せを得た気がする。「最終回」くらいはこんな思いをしてもいいはずだ。

「今日はありがとうね。」

「でも誘ったのは僕だよ。」

「いいの、とにかくありがとう。」

「こちらこそ。」

私の「最終回」につきあってくれてありがとう。キムラ君は明日どうなっているのだろう。今日のことを覚えているのだろうか。できれば、忘れていて欲しい。明日私はいないのだから。そう考えていると思わずこみ上げてきた。

「あつ、もう帰らなくちゃ。」

「え？あ、そうか、もうこんな時間が、またね。」

また、はもうない。もう一生会えない。もうだめだ。涙がこぼれそうだ。

「今日は本当にありがとう、さよなら。」

早口に言って、その場を去った。彼の顔は見なかった。

公園から少しはなれた場所のベンチ。11時半、キムラ君と出会ってもう半日以上たっている。たった半日。幸せな時間だった。涙が止まらない。この本の力を借りなくても、自分が勇気をもっていたら、なんて今頃思う。情けない。私は命と引き換えに今日一日を買った。後悔はないけど、なんだか空しい。涙が止まらない。もしかしたら私は昨日すでにこの世から消えていたのかもしれない。今日一日は夢だったのかもしれない。涙で星も見えない。時計は11時52分をさしている。かばんから「最終回」を出す。読み返してみる。

『10時に商店街に行く。ぶらぶらしていると数分後にキムラ君に出会う。キムラ君が声をかけてくる。どこかへ行こうと誘われる。適当に商店街を歩く。会話は弾み、楽しい時間を過ごす。昼前くらいになってどこか店に入って昼食をとる。夕方くらいに二人でソフトクリームを食べる。夕食をとった後、星の見える公園へ行く。二人は寄り添って星を眺める。』

涙で文字がかすむ。読むのを止め、その本を抱きしめた。

さよなら。

深夜になって闇は増す。

その分さつきよりも星はきれいに見えた。

翌日、遺体が発見された。

遺留品としてある本が押収された。

「またか・・・」

警察官はつぶやいた。

『10時ごろ商店街へ行くとルミさんと偶然出会う』

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2084c/>

最終回

2010年10月11日14時05分発行